

丹波焼の里 ミュゼシター

2025
spring
summer

vol.
37

発行：やきものの里プロデュース倶楽部

丹波の手仕事 匠の技 23

夢工房陶泉窯「墨流し」
大上 磯松氏

丹波焼の里の楽しみ方、色々パート 5

住吉神社

インタビュー

重松あゆみ展 Jomon Resonance

謎めくかたち、色の誘惑

重松 あゆみ氏

夢工房陶泉窯 工房



夢工房陶泉窯 大上 磯松

〒669・2141

兵庫県丹波篠山市今田町下立杭172

電話 079・597・2002

文・上田 智津子 写真・迫田 隆



丹波の手仕事

匠の技 23

夢工房陶泉窯「墨流し」 大上 磯松氏

三田方面から三本峠を越えて今田町に入ると下立杭に大きな口グハウスが見えてきます。ここが「夢工房」。当主の大上磯松氏がこやかに迎えてくださいます。江戸時代から続く窯元で、祖父の栄一氏の時に「日本製陶所」を創業。父磯和氏では株式会社「大上製陶所」となり大量生産の会社として従業員も十数人抱えた窯元さんで磯松氏も経営者として後を継ぐのだからという気持ちだったそうです。物づくりには携わってこなかったのですが、24歳で大上昇氏に師事し陶芸を一から学ぶことになりました。その後六窯焼成などを経て陶芸の楽しさに興味が高まり、宝塚で陶芸教室の指導をするようになったことがきっかけとなり2000年、ここにログハウスを建てて夢工房として陶芸サロン（教室）をオープン。多くの方の指導をされ、陶芸を教える楽しさを再認識されました。

今回は丹波焼にも使われている伝統技法の墨流しを見せていただきました。半乾きの生地に白化粧土と言われる泥漿を器に施してその上に黒化粧土をかけて墨を流したような模様を描くものです。化粧土を付けるタイミングなど難しく形が崩れることもあります。

スマホのスピーカー（POTS）を丹波焼で初めて作られたり穴窯にも力を入れておられる磯松氏ですが丹波焼の今後のことを伺うと「どんどん遊んで、やったことないことをやっていったらいい。作る喜びを伝えていきたい。穴窯も楽しいしね」穴窯の作品には「いそ」のサインをされています。「磯松と言う名前は若いときは嫌いでね。年寄り臭くてね」「今は？」「だいすきです」とにっこりと笑われました。



大上磯松作 墨流し皿

令和6年秋の叙勲

瑞宝単光章 受章

大上 巧氏 (大熊窯)

大学卒業後、宮永東山に師事、その後「大熊窯」を継ぎ50年余、2009年には「伝統工芸士」に認定されスポイドや筒で模様を描く装飾技法「イチツン」など伝統の技を極める一方、丹波立杭陶磁器協同組合理事長としても地域に貢献、その伝統工芸業務功勞が認められ受章されました。

1978年、若手7人が主体となつて立ち上げ、昨年47回目を迎えた丹波焼の最大のイベント「丹波焼陶器まつり」の立役者でもあり、2013年には丹波焼最古の現役登窯の「登窯修復実行委員会」の委員長としてその修復にも深く関わって、里の活性化に貢献されました。

また兵庫
県工芸美術
作家協会理
事長を歴任、
2021年
には兵庫県
文化賞受賞
と、幅広く活躍されてきました。



丹波焼、丹波焼の里、兵庫県の工芸の発展に「尽力され、丹波焼9人目の受章者となられましたことを心よりお喜び申し上げます。

おめでとうございます

令和6年度兵庫県技能顕功賞

市野 元和氏 (省三窯)

松本 強氏 (まるまつ窯)

取材 増田 和子

「雪華」兵庫陶芸美術館
学芸員 私のおススメ作品



東山焼「染付雪華文大鉢」
江戸時代後期 兵庫陶芸美術館
開館20周年記念特別展
「東山焼と姫路のやきもの」に出品

直径30cmを超える白地の鉢の見込みには、青が映える六角形を基本としたさまざまな文様が散りばめられています。

江戸時代後期の天保3年(1832)、下総国(千葉県北部・茨城県南西部他)古河藩主であった土井利位(1789~1848)は、オランダから輸入した顕微鏡を使い、約20年の歳月をかけて、雪の結晶を観察し、その模様を圖案化してまとめた『雪華図説』を出版

しました。利位は、雪の結晶を「雪華」と名付け、『雪華図説』には86種類の雪の結晶が掲載され、武家や公家向けの贈答品とされました。天保8年(1837)には、越後国(新潟県)で生まれ、地元豪商であった鈴木牧之(1770~1842)が越後の雪の多さや雪国の生活を綴った『北越雪譜』に「雪華図」を引用し、ベストセラーになりました。このため、江戸では「雪華」文が浮世絵に描かれた他、刀の鐔やかんざし、着物の柄などに取り入れられ、流行しました。

文政5年(1822)、姫路で創業した東山焼は、肥前有田(佐賀県)から窯業技術を、京(京都府)から京焼の最新の意匠をそれぞれ移入し、染付や青磁などを中心とした優品が生みだされました。本作は、江戸での「雪華」文の流行を取り入れて製作されたものであり、時世を捉え、製品に反映させる進取の気性に富んだ、当時の陶工たちの姿が垣間見られます。

学芸課長 仁尾 一人

丹波焼登窯遺跡発掘調査

日本六古窯のひとつで、平安末期を起源とされる丹波焼の里で、登窯遺跡発掘調査が実施され、その調査現場が公開されました。

現場は集落のある里から数分山道を登った山裾の傾斜地の雑木林で、遺跡とは気づきませんでした。

上立杭地区では窯場として北・本・南の3基の共同窯があったことが知られています。今回は中窯(本窯)跡の調査で、焼成室幅約2m・全長90mの登窯



上立杭 中窯(本窯)跡

で、筒書徳利、甕、壺、播鉢、植木鉢等が焼かれ、江戸時代前期〜明治時代の頃に操業していたことが分かりました。

下立杭の窯場としては4基の共同窯があったことが知られており、今回はその中間に位置する新窯跡の調査です。焼成室幅約2m・全長103.5mの巨大登窯で、筒書徳利、甕、壺、播鉢、等が焼かれ、江戸時代後半〜明治時代の頃に操業していたことが分かりました。



下立杭 新窯跡

いづれの窯跡も窯床は複数回の補修が行われ、焼成室の境目に30cmほどの段が設けられており、江戸時代の丹波焼の登窯の焼成室の構造について、段を有するものがあつたという新しい発見もありました。今回の調査結果を地域で共有し、丹波焼850年の歴史を伝えていくために、文化観光拠点「陶の郷」に展示・公開される予定です。

取材 藤枝 憲文

丹波焼の里の
楽しみ方、色々 パート5

住吉神社

今田町全域は古くから摂津堺住吉神社の荘園で小野原荘とよばれていました。文保元年(1317)に小野原の地に分霊を勧請(かんじよう)されたのがこの地域の住吉神社の始まりで、江戸時代初期(一七世紀中期)には、ここ立杭にも分祀(ぶんし)が行われました。

上立杭住吉神社へは、今年掛け替え工事が行われる四斗谷川に架かる宮橋1号橋を渡り、一の鳥居をくぐり参道を進みます。突き当たりを左に150メートル程行くと、境内の入口にある二の鳥居が見えます。

二の鳥居は、寛政13年(1801)の造立ですが、平成29年(2017)の台風で倒れ、足下がコンクリートで補強されました。一礼をして鳥居をくぐり、境内を少し中に進むと空気が変わるのを感じるかも知れません。神域の雰囲気を感じてみて下さい。



阿形の狛犬

本殿に繋がる石段の下には、神社にはお馴染みの狛犬がいます。でも、右側の阿形(あぎよう)の狛犬をよく見て下さい。子どもの狛犬を抱え、その子どもが玉を抱えています。玉や子どもを抱えているものは、時々見かけますが、両方一緒というのは、珍しくあまり見かけません。

本殿は、江戸中期「享保9年(1724)」頃の創建と考えられています。現在、覆屋(おおいや)に囲まれました、合祀殿(本殿覆中央に祭祀されています。お参りの後うしろを振り返ると舞堂と長床を連ねる屋根の上に鳩の瓦飾りを見ることが出来ます。帰りには、入り口のポケットパークで一休みされてはいかがでしょう。

文・写真 植田 正実

源泉かけ流しの日帰り天然温泉



緑に囲まれた広い露天風呂で ゆったり、のんびり、ほかほか。農産物直売所、軽食コーナーも併設、1日ゆっくりお過ごしください。



営業時間
AM10:00 ~ PM9:00 (PM8:30 受付終了)
※営業時間は変更になることがあります。

定休日 毎週火曜日 (祝日は営業)

〒669-2153
兵庫県丹波篠山市今田町今田新田 21-10
TEL.079-590-3377

<http://yume-konda.com/>

◆ 入浴料 ◆
大人 800 円 (中学生以上)
小人 400 円 (小学生)
※小学生未満 無料

HP Twitter Instagram

重松あゆみ展 Jomon Resonance

謎めくかたち、色の誘惑



1958 大阪府豊中市に生まれる
1981 京都市立芸術大学美術学部
陶磁器専攻卒業
1983 京都市立芸術大学大学院
美術研究科陶磁器専攻修了
京都市立芸術大学名誉教授
国際陶芸アカデミー会員

重松 あゆみ 氏

陶芸の道に入ったきっかけをお聞かせいただけますか。

大学で陶芸と出会いました。芸術系に進学するのは高校2年の終わりくらいに決めました。それまでは美術部でもないし経験もなかったのですが、手仕事にそこが来て京都市立芸術大学の工芸科に入学しました。工芸の中で染織と漆と陶磁器のそれぞれの素材を体験したのち、2年生からどの専攻にするかを選択する際に、陶磁器に決めました。粘土は触っていても何か生きていく感じがする実感があつた素材でした。やきものは大学で初めて体験しました。

3年生のときははるくろの器に化粧土で装飾する作品を作っていて、最後の合評会の際に、鈴木治先生が、「装飾はあるけれど形がない」と言われたんです。そのときは、「形がない」という意味が私にはわからなかったんですけど、結局その後ずっと形の仕事をすることにしました。

重松先生の創作と発表の場は、公募展や個展ですか。

個展を中心に発表しています。大学を出てから2年間は個人展以外にいろいろな公募展やグループ展に出してました。卒業した当時はパブルのころだったので、多くの公募展がありました。朝日現代クラフト展に出品した《彩色黒陶》のオカリナが受賞したのも1つのきっかけですが、作品発表を続けていると小さな展覧会はいっぱいオファーが来たんですよ。もう何でもかんでもとにかくやってみて、2年くらい経ったところから、器は自分には向かないとか、選ぶようになっていきました。その後は発表するものは自分の本当にやりたいことだけをやるように個展を中心に続けてきました。

形にしていきたいものが、自分の中から出てくるという感覚なんですか。

大学は教えてもらおうところではなく、自分から学ぶところなのですが、ベイスになる技術を教わったあと、自分が何をしたいのか分からず悩みました。



Jomon Anatomy 2017 兵庫陶芸美術館

ただ、「装飾」というキーワードは学生時代から自分の中にありました。

80年代の装飾的な作品は、スケッチブックに思いつく線を二次元で描くのが発想の方法だったわけです。描くことで新鮮な線を探していました。ところがスケッチブック1冊描いても新鮮なものが出てこなくなると、何もできなくなつた時期があつて、それで直接粘土で考えるということをやってみようとして挑戦したのが91年です。それ以降は三次元のマケットづくりで形を発想するようにになりました。それが《骨の耳》シリーズの始まりです。小さな粘土の塊を触りながら出てくる気がかりな形を探す、手で考える感覚です。

その90年代の《骨の耳》シリーズの有機的な形と、やきものらしい色彩感覚が、結局私の1つのスタイルとして評価されていったのですが、《骨の耳》も90年代の終わりくらいに出尽くしてきた感じがありました。

90年代の終わりに、東京のあるギャラリーで、「器物と美術」という企画展があつて、器（うつわ）についてもう一回、真正面から考えなければいけないチャンスが与えられたことがあり、ここで作った作品がその次に、東京国立近代美術館の「形の領分」という展覧会に繋がっていきんです。それまでの《骨の耳》の形は、閉じられているがゆえに、中が空洞だということとはわからないけれども、穴があると器物になる。やきものの構造や器は人の臓器にも似ていると考えました。2000年代の内部空間を見せる作品はそうして生まれています。

作品を作る中で、発信するという出

力の部分とは違って、入力というのか、アイディアのようなものを探しておられるのでしょうか。

この兵庫陶芸美術館で開催された、縄文の展覧会で縄文時代の耳飾りに出会ったのですが、ずっと眺めていられるんですね、なぜそんなに魅力があるんだろう。飽きずに佇んでいるっていうのはすごく大きなことで、また繰り返し見に来ますよ。魅力をもたらず理由が何かあるんですよ。その知的な造形に、宇宙的なものを感じられ、ある種の規則性や奥行きや繰り返されることや、いろんな要素がこのちっちゃな耳飾りの中に含まれていました。この耳飾りは私にとってはずこいものに出会ったという感じでした。その後多くの縄文土器からアイデアをもらいました。

そういった、それに近いものを作ってみたいというふうな思われたわけですか。

縄文土器に近いものを作ろうとは思わないうけど、やはり魅力あるものは理解したくなりますから模刻をしました。

2015年には、実際のものを見てスケッチしたり、写真を撮らせてもらったりしてそれを模刻するということが最初にやつて、今の縄文シリーズの最初の作品が生まれました。その後、実物を直接見ながら造るチャンスがありました。模刻をしている中で、3次元装飾が成立している造形の仕組みは何だろうみたいなことは学ぶことができました。縄文土器を魅力的に見せる線や渦や穴などの、立体としての仕組みを、作品の中に発想として取り入れました。それまでの内と外が繋がる形にその仕組みを足していった、複雑に展開していったという感じですね、今の縄文シリーズは。

重松先生から今の若い作り手たちに對して伝えたいこととおありでしょうか。

自分にとってリアルなことをやってみて欲しいと思います。私が多分、立体造

形の中身をやっている最後の世代のよくな気はしています。今、現代陶芸はもう感覚的なんです、造形を語ったりしない傾向にあるので、抽象の造形にこだわって陶芸をとらえようとしてきた世代の作品も見に行つてほしいと思います。頭で知っていても実際に手を動かさないとわからないことがたくさんあるので、手を動かして考えてほしいです。

自分がやり続けてきたことの積み重ねが今の作品になっていくので、続けることは大事です。私はおそらく走泥社の先生方がやってこられたことの、延長線上上みたなどころを歩んでいるとは思ってすけれども、革新が積みあがって作られるのが伝統だと思っています。

丹波焼を外から見られて、何か感じられることかありましたら一言お願いします。

今回ワークショップをする関係で丹波の土を少し見本でいただいたのですが、この土から私が作品に使用しているセラジラタという化粧土を作ってみました。《Bone Ear》という展示室の最初に置いてある作品の鮮やかなオレンジの部分は丹波土の色なんです。丹波1号土という成型のための土が、低温焼成ではこんな綺麗なオレンジー色が出るんです。これは私のやきものに對する視点なのですが、丹波土の美しい色を見ていただきたいと思っています。



Red Muse 2024

※イベントの内容は、変更・中止となる場合があります。
※最新の展覧会・講演会・ワークショップ等の情報は当館ホームページをご覧ください。

●開館20周年記念特別展のご案内

東山焼と姫路のやきもの

3月15日(土)～5月25日(日)

東山焼は、文政5年(1822)に現在の兵庫県姫路市東山で操業を始めました。その後、姫路城下の男山に窯場を移し、青磁や染付を中心に多彩な意匠のやきものを作りました。本展では、東山焼の優品とともに、明治時代に永世舎で作られた色絵の輸出向け磁器や、鷺脚焼などを紹介します。



東山《染付桜川文水指》
江戸時代後期
兵庫陶芸美術館(田中寛コレクション)

MINGEI ALIVE -いま、生きている民藝

9月6日(土)～11月24日(月・振休)

およそ100年前に柳宗悦(1889-1961)によって提唱された「民藝」。それは日々の暮らしに寄り添うものに美を見出すという新しい価値観であり、提案でした。本展では、当館のコレクションの核の一つである個人作家による器(うつわ)作品を展覧しつつ、現代の作家の様々な器作品を通じて、「いま、生きている民藝」の諸相について考える機会とします。



田中雅文《Layer.series CLOUD 5》
2018年

博覧会の時代 HYOGO 発、明治の輸出陶磁

6月7日(土)～8月24日(日)

国内外の博覧会への出品や輸出が大いに奨励され、陶磁器製造が殖産興業とも深く結びついた明治時代。兵庫県内でも出石や姫路、淡路、貿易港を擁する神戸などで海外に向けた華やかなやきものが作られました。本展では、2025年の大阪・関西万博の開催に合わせ、博覧会が盛んに行われた時代に県内で作られた輸出陶磁に注目し、その諸相を探ります。



出石(盈進社)《色絵武者図耳付花瓶》
19世紀後半
兵庫陶芸美術館

●テーマ展のご案内

丹波焼の世界 season9

1月2日(木)～2026年2月23日(月・祝)

2017年に日本六古窯の一つとして日本遺産に認定された丹波焼は、平安時代末期に、在地の土師器や東播系中世須恵器の技術基盤のうえに、東海地方の窯業技術などを受容して開窯しました。本展では、時代の荒波を乗り越えて、今も操業し続けている丹波焼の移り変わりを紹介します。



丹波《白地銅緑釉流徳利》
江戸時代後期
兵庫陶芸美術館

兵庫陶芸美術館 〒669-2135 兵庫県丹波篠山市今田町上立杭4 電話:079-597-3961(代表) HP https://www.mcart.jp

丹波焼の里情報コーナーのご案内

「丹波の青磁」

3月14日(金)～5月25日(日)

「丹波焼と女性作家」

6月6日(金)～8月24日(日)

兵庫陶芸美術館 展示棟入口横 観覧無料
企画:陶芸文化プロデューサー
協力:丹波焼窯元等

プレゼントのお知らせ

兵庫陶芸美術館・陶の郷・こんだ薬師温泉の招待券を3施設セットでペア5組10名様にプレゼント。

●応募方法

ハガキに 〒住所・氏名・年齢・本紙の入手場所(○美術館など)・ご意見、ご感想をご記入の上、下記の宛先までお送りください。

●締め切り

8月末日消印有効。応募多数の場合は抽選。

●宛先

〒669-2135 丹波篠山市今田町上立杭4
兵庫陶芸美術館内「陶芸文化プロデューサー」宛
当選発表は発送をもって代えさせていただきます。

▼問合せ 兵庫陶芸美術館
電話:079-597-3961

▼問合せ 《兵庫陶芸美術館》
5月3日(土・祝)～5日(月・祝)
展覧会を特別割引でご観覧いただけます。
一般12000円↓9000円
大学生9000円↓7000円
70歳以上6000円↓4500円、高校生以下無料
詳しくは、ホームページで確認ください。



▼問合せ 丹波立杭陶磁器協同組合
電話:079-597-2034

※春ものがたり期間中は、立杭陶の郷入園無料

丹波焼春の軽トラ市
5月5日(月・祝)10時～16時
兵庫陶芸美術館入口周辺

窯元イベント・グループ窯ガラムンWS・
七輪陶芸、スタンブラリーなど
5月3日(土・祝)～5日(月・祝)

立杭陶の郷・各窯元・最古の登窯

会場 立杭陶の郷、各窯元、兵庫陶芸美術館など

期間 5月3日(土・祝)～5日(月・祝) 3日間
10時～16時まで

内容 立杭陶の郷、各窯元、兵庫陶芸美術館など

◆第19回「やきものの里 春ものがたり」
緑豊かな自然に囲まれたやきもの里で、様々なイベントを開催します。

イベント案内

丹波伝統工芸公園

立杭 陶の郷

丹波焼を『見る・作る・楽しむ』

〒669-2135 兵庫県丹波篠山市今田町上立杭3
TEL.079-597-2034 FAX.079-597-3232
URL https://tanbayaki.com

【入園料】高校生以上 200円

小中学生 50円

【開園時間】AM10:00～PM5:00(通年)

【休園日】年末年始

毎週火曜日

(但し、祝日は営業します。)

窯元横丁

丹波焼の51軒の窯元の作品を買うことが出来る「窯元横丁」。どこか懐かしくあたたかな空間で、ゆったりと買い物をお楽しみいただけます。伝統的な丹波焼からアーティスティックな作品まで、さまざまなやきものが展示販売されています。一つひとつの作品をじっくり手にとりながら、散歩気分歩いてみてください。見ているだけでも楽しくなりますよ。

陶芸教室

丹波焼の郷で、陶芸を体験してみませんか。オリジナルの作品を制作する手びねり(粘土細工)や、カラフルな絵付けを手軽に体験いただけます。また、毎週日曜日には予約制で「ガラムンアクセサリーワークショップ」を開催しております。是非ご利用ください。